

たい焼き

宮城県古川高等学校 藤島 樹里

ただ、ひとりで食べてしまえば良いだけの話だった。でも、私はしなかった、できなかった。

その日は長引いた風邪で咳と鼻水がとまらない日で、少しでも体に異常があることが私の気持ちを後ろ向きに引きずっていた。その晩、母がスーパーでたい焼きを買ってきた。「晩御飯を食べて、少しお腹が空いた頃に食べよう」と母は言った。些細な約束だった。でも、なんだかそれがとても楽しみで、わくわくしていた。例えるのならクリスマスのプレゼントを待つ子どものような気持ち、という感じた。よく聞く例えだけれど、そんな気持ちだった。全ての人がそうだという訳ではないけれど、子どもは親の前だと幼い心になるものなのだろうか。友達の前だとそれを隠そうとするのも不思議だ。母のお腹はいつ空くのだろうなんて思いながら待っていた。でも、反対に今日はたい焼きを食べないような予感もした。この予感には理由があった。私の母は帰ってきてご飯を食べたら、テレビ番組を見て、コタツに入っているうちに眠ってしまうことがよくある。その状態を私の姉は「コタツムリ」と呼ぶ。きつと仕事で疲れているだろうし、学校に行く私のために毎朝早起きしてお弁当を作ってくれている。そして、やはりその日も母はコタツで眠ってしまった。人は睡魔に抗えない。私も毎日授業中の睡魔との戦いでよく知っている。さすがに「起きて、たい焼き食べよう」なんて、わざわざ起こすような真似はしなかった。授業中ではないのだから心ゆくまで眠ってもらうべきだ。母が眠ってしまったのなら、自分でたい焼きを温めてひとりで食べれば良いと思った。でも、私はそうしなかった。どうやら私が楽しみにしていたのは、ただ単にたい焼きを食べることではなかったようだった。確かに、たい焼きを食べたいとは思っていたけれど何かが違った。私は「母と一緒に」たい焼きを食べることを楽しみにしていた。私にとって、大きな価値があった。心待ちにするくらいには。一緒に食べることに何の意味があるのか明確に言葉で表現することは私にはできそうもなかったが、その日はたい焼きを食べないことにした。寂しさを感じたけれど知らないふりをした。お風呂に入って、早く寝てしまおうと思った。お風呂からあがっても母は眠っていた。濡れた髪を乾かしながら、明日の夜に食べられるであろうたい焼きに思いを馳せていた。明日は母とたい焼きを食べられるだろうか、なんて思っていたとき、すくつと母が起きた。それから母は「たい焼き食べる？」と言った。思ってもみなかったことで驚いたけれど、すぐに「食べる」と答えた。母

が温めてくれたたい焼きからとても良い匂いがした。電子レンジで温めた後に仕上げにトースターで温めてくれたらしい。ためしにたい焼きのお腹をつめでひっかいてみると「かりかり」と音がした。食べてもやっぱり「かりっ」と音がして、温かい生地とあんこが私を幸せにした。優しく包み込まれた気がした。母が眠っている間に寂しさを感じていたことは恥ずかしいから絶対に母には伝えない。私とのちっぽけな約束を、母が思い出してくれたことに、とても嬉しく思ったことも心のうちにしまっておく。最近、気持ちが後ろ向きに引きずられることが多かった。そんなときは誰かと一緒においしいものを食べると良いと私は思う。たい焼きを食べていたら、目元が少し熱かった。きつと風邪のせい。母に「おいしい」とひとこと伝えた。